

たものと考えられます。

(2) 東側調査区

西側調査区から現在の門を隔てて東側に設定した調査区です。工作物や水道管等により部分的な調査でしたが、冠木門が存在していた時期の地表面と考えられる面がみつかりました。調査区北東隅では、土坑が1基みつかりましたが、遺構の性格はよくわかりませんでした。

冠木門は、絵図や文書の記述から4本柱と考えられるため、本来ならばこの調査区内に控柱の痕跡が残っていると考えられますが、調査では発見されませんでした。

また、門の南石垣の基礎を確認しました。西側調査区で検出した石垣の基礎と比べると、東から西に約20cm下がっていることが分かりました。石垣表面は、ノミによる加工痕のある部分とない部分に上下に分けられることから、その境界が江戸期の地表面と考えられます。

今年度及び前年度の発掘調査から、冠木門の規模や本柱の位置が明らかになりました。当時の冠木門は、門の幅が2間、地表面は現地表面よりも60cm程度下がっていたことが判明しました。また、礎石を据えるために地面を掘り込み、中に栗石を入れ、板状の石を積むことによって基礎地業を行っていることもわかりました。さらに、門の両側の袖石垣については、基礎となる部分に栗石を入れて固めていたことがわかりました。

冠木門跡の発掘は終了しましたが、引き続き調査成果



写真9 東側調査区全景 (東から)



写真10 平成25年度(左)、26年度(右)調査写真合成 (点線○が礎石)

を詳細に検討していきたいと考えています。



写真11 門の南石垣の根石

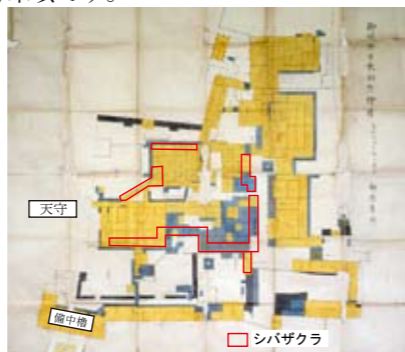
本丸にシバザクラを植えました。

公園としての整備の一環として、今年度は、本丸の樹木の整理を行いました。

これまで本丸は、ツツジや高木等により見通しがききにくかったため、これらを伐採・撤去しました。そして本丸御殿の輪郭をたどるようにシバザクラを植栽しました。今年度は御殿の西側にあたる主殿や居間、台所、料理ノ間の輪郭に合わせて植栽しています。

樹木がなくなったことで、本丸が一望できるようになりました。また、御殿跡をシバザクラで表示することにより、御殿の大きさを伺い知ることができます。

シバザクラの開花時期は、桜が散った後の4月後半から5月末頃です。



本丸御殿の絵図「御城御座敷向惣絵図」(文化五年)とシバザクラ植栽位置



写真12 本丸御殿の輪郭に植えられたシバザクラ(空中写真)

発行年月日 平成27年3月31日  
編集・発行 津山市教育委員会文化課  
〒708-0824 岡山県津山市沼600-1  
TEL (0868) 24-8413  
印刷 (株)福井印刷



写真1 裏鉄門下雁木と新しく取り付けられた木製階段(西から)

うらくろがねもん がんぎ  
裏鉄門下雁木の整備を行いました。

平成26年度の史跡津山城跡整備事業は、<sup>からめて</sup>搦手側の裏鉄門から裏中門に至る雁木(石段)の整備工事を実施しました。この雁木は、津山城にある通路の中でも長く急な階段で上り下りが困難であったため、安全に通行できるよう様々な工夫がなされてきました。

整備工事では、江戸期の雁木のみを残し、片側に木製階段を取り付けました。これにより、往時の雁木の姿を見ながら、より安全に通行することが可能になりました。

発掘調査では、昨年度に引き続き冠木門跡の発掘調査を実施しました。発掘調査により、門の規模や、基礎構造の一部を明らかにすることができました。

また、公園としての整備として、本丸における植栽の伐採、移植等の整理を行い、あらたにシバザクラを植えました。今回は、これらの事業概要を中心に紹介します。



裏鉄門下雁木の整備工事をおこないました。



写真2 整備前の裏鉄門下雁木

津山城の搦手側、本丸から二ノ丸へ向かう裏鉄門下の雁木（石の階段）を整備しました。

裏鉄門下の雁木は、津山城の通路の中でも長く、急傾斜の階段です。廃城後、通行しやすいように本来の雁木の上に石段を置くなど工夫をしていましたが、雁木の石が抜けてしまったり、石段がずれてしまったりと安全に通行することが難しくなっていました。

そこで今年度は、雁木を築城時の姿に戻し、なおかつ安全に通行できるように木製の階段を取り付ける整備を行いました。

整備はまず、廃城後に置かれた石段及び工作物の撤去から始めました。これらを取り除くと、本来の雁木が姿を現しました。雁木の段差は60～70cmもあり、上段の雁木と下段の雁木間はスロープ状になっていたと考え



写真3 廃城後の石段と工作物を撤去



写真4 雁木の石を復旧。雁木間は遺構保護のため土系舗装

られますが、段差が大きく、通行は非常に困難です。江戸時代の人々はこの段差を上り下りしていたのだろうか、と疑いたくなるほどです。

次に、「抜け」や「ずれ」が生じていた雁木の石を復旧し、遺構を保護するために、土系舗装を行いました（写真4）。写真で少し白っぽくみえる石が新しく補填した石です（写真の赤丸で囲んだ部分）。今は少し目立ちますが、まわりの石と同じ石材なので、年月が経つと馴染んでいきます。

最後に木製の階段を設置しました。階段は遺構である雁木を傷つけることがないように、雁木に接する材は雁木の形に合わせて削るなど様々な工夫がされています。今回の整備により、裏鉄門下の雁木はより安全に、築城時の姿を目にしながら通行できるようになりました。



写真5 新しく取り付けられた階段を支える束木の拡大写真。下の雁木の形状に合わせて削っている（光付けという）。

かぶきもん 冠木門跡の発掘調査が終了しました。

冠木門は津山城三の丸に至る通路上にある門で、両側を高石垣に挟まれた部分にあります。門の構造は絵図によって異なりますが、高麗門であった可能性が高いです。門の両側には低い袖石垣と土塀があり、両側の高石垣との間を塞いでいたと考えられます。明治7年～8年の城の取り壊しの際に、冠木門も取り壊されたと考えられます。昨年度の北半部の調査に続き、門の構造について詳細に検討するため、今年度は南半部の調査を行いました。

(1) 西側調査区

調査区北側、現在の門から約1m西のところに、直径80cm程度の大きな石がみつかりました。石の上面は平らで、石の下には河原石が詰められています。大きな石の前面（西側）には幅50cm、厚さ10cm程度の板状の石が7段～8段、西に面を揃えて積み重ねられています。大きな石と板状の石積みの中には、栗石（河原石）が充填されていました（写真6、8）。

これらの石の南側には栗石の層がみられました（模式図③）。栗石の層は、栗石と栗石の間が土でしっかりと固められており、層中から瓦片が出土しています。この栗石層の下には土の層がみられます（模式図②）。これ



写真6 西側調査区の全景（北西から）

は、栗石層の前段階の盛土と考えられます。盛土内からも少数の瓦片が出土しました。盛土の下層に非常に固くしまった面がみられます（模式図①）。この面は、大きな石や板状の石積みを含む部分に向かって大きく下がっ



写真7 津山絵図（元禄10年頃）に描かれた冠木門



図1 発掘調査位置と整備位置



写真8 門の礎石と基礎の板状の石積み（西から）

ていることから、この面の段階で地面を掘りこみ、石積みながされたと推測されます。

今回あらたにみつかった遺構の性格について、前年度の調査成果をふまえて考えてみたいと思います。

今回の調査でみつかった大きな石は、前年度調査でみつかった大きな石とほぼ同じ大きさで、検出された位置がほぼ南北方向に並んでいることや、石の上面の高さもほぼ同じであることから、冠木門の礎石のひとつであると推測されます。前年度調査でみつかった石との距離は約4m（2間）であることがわかりました。

また、板状の石積みについても、前年度調査とほぼ同じ状況であることから、石積みは礎石を安定させるための基礎であったと推測されます。

調査区南側でみつかった栗石層は、栗石が土でしっかりと固められていることや、位置関係、絵図との比較等から、門の柱の両側にあった袖石垣の基礎として積み

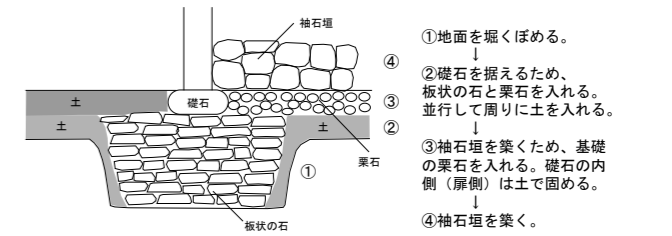


図2 門の基礎模式図